

# 胸腔鏡下肺がん手術

外科 診療部長  
宇山 攻

2023年5月発行

## 診療体制

徳島市民病院の呼吸器外科では、2025年4月から呼吸器外科専門医3名体制で診療を行っています。手術は基本的に、呼吸器外科チームのみで行っています。



## 対応疾患

呼吸器外科は肺、気管・気管支、縦隔、胸壁、横隔膜の手術を担当しています。具体的には、

- ・肺がんなどの肺悪性腫瘍
- ・転移性肺腫瘍
- ・肺良性腫瘍
- ・肺感染症（膿胸、非結核性抗酸菌症の一部、肺真菌症の一部）
- ・縦隔腫瘍（胸腺腫、胸腺がん）
- ・胸壁腫瘍（悪性胸膜中皮腫、神経鞘腫）
- ・気胸・肺嚢胞

などの手術を行っています。

当院は日本呼吸器外科学会専門医制度関連施設であり、多くの患者さんを受け入れています。年間約80例前後の呼吸器外科手術を行っています。

## 肺がん診療について

肺に腫瘍が見つかった場合、良性か悪性（がん）かの診断のために気管支鏡下生検を行います。気管支鏡とは内視鏡の一種で、先端にカメラが付いた細い管状の医療機器です。当院には多数の呼吸器内科専門医と気管支鏡専門医が在籍しており、安全で確実な検査が行われています。検査中は静脈麻酔により眠っていただくため苦痛は少なく、検査後は覚えていない方がほとんどです。

がんが強く疑われる特徴的な画像所見の場合(図1)は気管支鏡検査による確定診断を省き、そのまま診断と治療を兼ねた手術となることもあります。

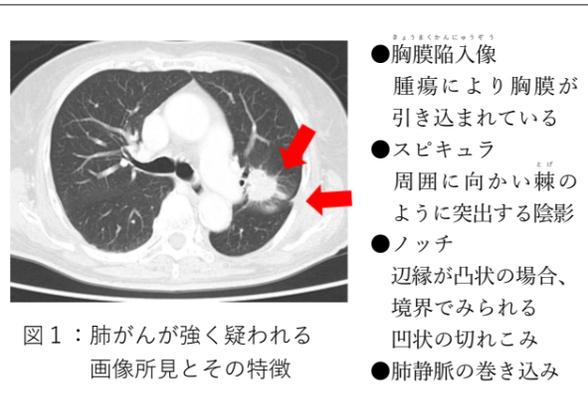


図1：肺がんが強く疑われる画像所見とその特徴

近年増えているすりガラス状結節(図2)の場合はその形状や大きさにより対応は異なります。すりガラスのような影は炎症、肺がんだちらの可能性もあり、CTで発見されたばかりの場合はまず画像による経過観察を行います。

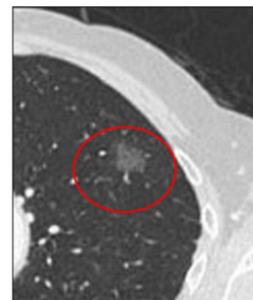


図2：すりガラス状結節

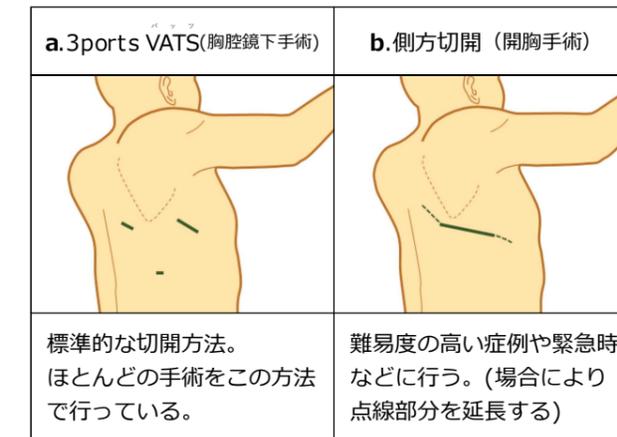
経過観察中に影が消えた場合は炎症性変化（良性）であったことになり、様子を見るのが可能です。経過観察後、不変または増大する場合は悪性の疑いが強くなるため、診断と治療をかねた手術を行います。

\*実際にはCT画像だけでなく、患者さんの年齢や病変の部位、別の病気を治療中かどうかなどを総合的に判断し、相談の上で方針が決定されます。

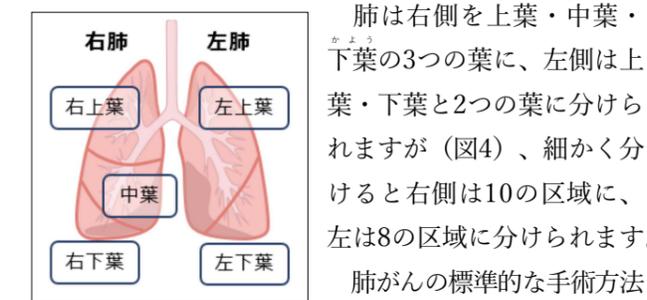
## 肺がん手術について

以前は、肺がんの手術はすべて皮膚を大きく切開する開胸手術で行われていましたが、2000年頃から数か所の傷のみで行う胸腔鏡下手術が主流となりました。現在当科では、肺がん手術の9割以上を小さな3か所の傷のみで行い、患者さんになるべく負担をかけない低侵襲手術が中心となっています(図3a)。なお、

- ・腫瘍が非常に大きく、肺を取り囲む胸壁にまで浸潤（浸み込むように広がること）している
- ・気管支の腫瘍を切除した後も空気の通り道としての機能を損なわないため、特殊な気管支形成が必要など、胸腔鏡下手術では困難な場合には、開胸手術を選択することもあります(図3b)。



↑ 図3：手術時の切開方法



↑ 図4：左右の肺葉

肺は右側を上葉・中葉・下葉の3つの葉に、左側は上葉・下葉と2つの葉に分けられますが(図4)、細かく分けると右側は10の区域に、左は8の区域に分けられます。肺がんの標準的な手術方法は、腫瘍が存在する部分の

葉切除です。一部のすりガラス状陰影や、2cm未満の結節影（円や楕円形の影）で充実性成分（CT画像等で見ると白く濃い部分）に乏しいものでは、区域切除や部分切除などの縮小手術を行うこともあります。区域切除や部分切除では、通常の葉切除よりも肺を多く残すことができるため呼吸機能温存には優れていますが、再発が5%程度みられるという報告があります。

どのような方法を選択するかは、腫瘍の場所や状態、また年齢や手術後に予想される肺機能、間質性肺炎など肺に他の病状がないか等を総合的に評価し、患者さんと相談の上で決めさせていただいております(図5)。

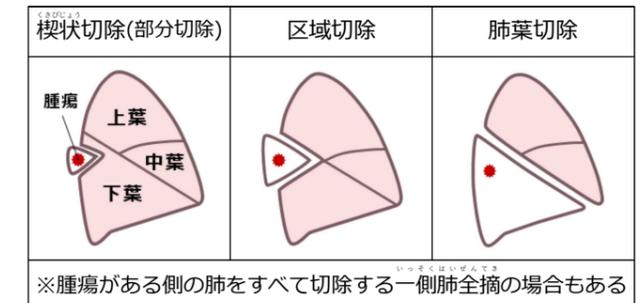


図5：手術方法の一例（右肺を横から見た図）

## 退院後

退院後、外来受診する所に最終的な病理診断結果と、肺がん病期をお伝えさせていただきます。病期により、追加の化学療法が必要となることもあります。術後2年間は3か月おきの外来経過観察、3年目からは半年おきの外来経過観察を行っています。

## 受診にあたって

痰、血痰、呼吸苦など、なんらかの症状がある場合はまずかかりつけ医の先生にご相談ください。検査により肺がんが疑われた場合や、肺がんが否定できない所見がみられた場合には、紹介状をもって当院呼吸器外科、または呼吸器内科を受診してください。院内で連携しておりますので、どちらの診療科でも対応可能です。肺がん健診で要精査、要治療とされた結果票をお持ちの場合は直接当院受診でも、かかりつけの先生からの紹介でもどちらでも対応可能です。患者さんによりよい医療を提供するために日々努め、丁寧な診療を心掛けています。安心して受診してください。